

自由集会-1

タイトル：サル屋とヒト屋の共同研究とは？：「人類社会の進化史的基盤研究」の試み

開催日時：2015年7月18日（土）13:00-15:40

会場：京都大学百周年時計台記念館国際交流ホール1（ホールA）

企画責任者・司会：河合香吏（東京外大・AA研）

話題提供者：伊藤詞子（京都大・WRC）、北村光二（岡山大・名誉教授）、内堀基光（放送大・教養）

コメンテーター：西川真理（京都大・理）、水野友有（中部学院大・教育）、座馬耕一郎（京都大・ASAFAS）

内容：

1. 趣旨説明（河合）

人類は、家族、仲間、民族、国家など、大小さまざまな集団の中で他者とともに生きている。一生物種としての人類は、群居性動物である霊長類の一員として、集団で生活する方途を進化させてきたといえる。しかも人類は重層的で複雑に絡み合い、しばしば巨大な集団のなかに生きている。こうした集団の生成には、諸制度（規範やルール、コンヴェンション等を含む）を生み出すとともに、高度な社会性 sociality の進化があったと考えられる。この命題に迫るため、霊長類社会／生態学、生態人類学、社会文化人類学に与する研究者が集い、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所において共同研究「人類社会の進化史的基盤研究」を開始して、3期10年が過ぎた。その間、テーマを「集団」、「制度」、「他者」と展開しつつ、人類の社会と社会性の進化について議論を重ねてきた。

本集会では、ヒト以外の野生霊長類の社会を研究対象とする「サル屋」とヒトの社会を研究対象とする「ヒト屋」の共同討議という形で続けられてきた本共同研究がどのように有効であるのか（ないのか）、また、それが日本霊長類学会という場でどのような評価を受け、議論されるかを問うことを目指した（が、司会の不手際により十分な議論の時間が確保できなかったことを深く反省する）。

2. 話題提供

2-1 「霊長類学者、人類学者に会う」（伊藤）

伊藤は主として野生チンパンジー（マハレ）の離合集散なる集団現象の解明を目指すサル屋である。伊藤にとって、ヒト屋は「異文化」に属する「言葉が通じるまでに時間のかかる」相手である。また、本共同研究が「集団」、「制度」、「他者」といったテーマの提示はするが、それらをあらかじめ定義しないことに難しさを感じる一方で、あらか

じめ定義が決まっていたら議論は「人間にある現象が霊長類にもあるか、ないか」を確認するだけの「ある／なし」議論に陥ってしまうため、これにも否定的である。こうした状況の中、伊藤は本共同研究にふたつの「しかけ」を見いだす。ひとつは現場で見たこと、経験したことを基盤とする研究態勢であり、もうひとつは「進化史的基盤」という視点であるが、そのどちらにも「概念を生活の現場に引きずり下ろす」という共通点があると指摘した。そして、ヒト屋との共同討議により、サルのやっていることに多くの可能性が秘められていることに気づかされるとともに、観察だけではわからないことを理解する契機が与えられると自己評価した。

2 - 2 『コミュニケーションの進化』を考える」(北村)

北村はニホンザルやボノボの調査研究に従事したのち、狩猟採集民や牧畜民に研究対象を移したヒト屋であり、コミュニケーション論を軸に、霊長類と人類に跨る研究を続けてきた。本集会では、「霊長類／人類の社会性の進化」の考察を具体的なものにする方法として、「コミュニケーションの進化」を掲げた。まず、ニホンザル、チンパンジー属、人間のコミュニケーションを概観したのち、ブッシュマン社会の事例が詳細に検討された。結論として、コミュニケーションの進化を考えるうえで最初に考慮されるべきは、コミュニケーションの接続により生み出される相互行為的出来事が繰り返されるために何をしているのかであること、人間社会への移行でもたらされたコミュニケーションのあり方の転換における最重要点は、「私と関わりを持ちつつも拒否もする他者」の登場と、「双方の自由な選択の重ね合わせ」としてのコミュニケーションの成立であること、コミュニケーションの当事者にとって対処すべき最初の課題は、相手がそのときのコミュニケーションに反応することで次のコミュニケーションへの接続が実現することであることを挙げた。

2 - 3 「凡庸ながらマルクスの箴言から：サルの解剖とヒトの解剖との対照の延長上で語ること」(内堀)

内堀は主としてボルネオ島の焼畑農耕民イバンの文化社会を調査研究してきたヒト屋(民族学者)である。彼は霊長類の研究が人類の研究のどの側面に役に立つのか、またその逆は如何ということ、を、「人間の解剖はサルの解剖のための鍵である」というマルクスの箴言から始めた。だが、内堀自身が共同研究から得た印象はマルクスとは逆に、ヒトの行動や思念の研究にとって霊長類の研究は多くを与えてくれるが、その逆はアナロジーと擬人化の壁を乗り越えるのに苦労しているとみた。サル屋もヒト屋もフィールド系研究者であるかぎり、研究対象は具体的な個体群(群れや村)である。しかし、そ

こから一般化するときには、サル屋が「種」のレベルに行くのに対し、ヒト屋（民族学者）は「民族」や「中間範疇（個体群と全体社会の間にある）」へ向かうという相違を指摘した。そして、リアルな時間軸に沿った進化の語りを追究できるのは古人類学だけであるとし、それでも人類と霊長類の比較検討には「社会生成」の論理を見出したいという。ただ、現状では、比較論理として同じレベルでの議論を展開し相互に結びつけることから、無視しえない距離があると率直な反省を述べた。

3. コメント

3 - 1 西川氏はヒト屋との関わりはほとんどないものの、「コミュニケーションの自然誌研究会」（京都大学）に参加するなど、人間研究にも興味を持つ若手のサル屋（ニホンザル・屋久島）である。今回のコメントに向け、われわれの成果論集を「読み返した」という熱心さに感謝する。論集の内容をよく理解し、以下のコメントと質問を提示した。

ヒト屋の研究対象は「現代人」であるが、ヒトの社会性の進化史的基盤を検討する際に、その射程はいかなるものであり、それは「進化」とどのように結びつくのか、「ヒトと現生霊長類との比較・検討」を謳っているが、霊長類はチンパンジー属に偏っているので、ゴリラやオランウータンなども含めるべきであり（それは、研究対象が大型類人猿ではないサル屋はいかに関われるのかとの問いを含む）、自然人類学の新知見も考慮すべきである。「共同研究」の認識として、西川氏は「あるテーマに同程度に関与して共著論文をまとめる」と捉えるのに対し、われわれの共同研究では共同討議はしても、最終的には単著論文が論文集にまとめられ、ヒト屋とサル屋が同程度に関与して作上げた共著論文がない、等の指摘をした。

3 - 2 水野氏は障害児教育・心理学から霊長類学（飼育下チンパンジーの母子関係）へと研究を進めてきた比較発達心理学者である。心理学や教育学の分野ではチンパンジーの研究は「おもしろい」と言われるものの「役に立つ」とは言われず共同研究に発展しないというジレンマを抱えてきた。それは、伊藤のいう「概念を生活の現場に引きずり降ろして社会について考える」ことに関連し、心理学や教育学でも臨床研究者は、生活の現場をフィールドにしているのに、そこには（何らかの）「壁」があり、霊長類の研究と交わりにくいという。これに対して、サル屋とヒト屋は現場で起こったことを共通のフィールドにしている点を評価する。以下、各話題提供者に対し「飼育下の研究は野生霊長類の研究者にとって比較の対象になるのか否か（伊藤）」、「母子関係の研究ではコミュニケーションはキー概念だが、母にとって赤ん坊が、赤ん坊にとって母が、「他者」である（母子を他者の文脈で語る）ことはヒト屋から得られた新鮮な視点であ

った（北村）」、そして「進化は比較の別名だと言うときの‘比較’は、心理学における‘比較’と決定的な違いがあるのか否か（内堀）」などの質問・コメントが投げかけられた。

3 - 3 座馬氏はサル屋とヒト屋が同居していた頃に人類進化論研究室（京都大）で院生時代を送ったサル屋（チンパンジー・マハレ）である。院生時代には京都大学の自然人類学、人類進化論、アフリカ地域研究センターの3機関による合同ゼミが年に2回開かれており、化石屋（自然人類学。骨屋ともいう）、サル屋、ヒト屋の話を聞くことにより、広い視野の中に自分の研究を位置づける機会になっていたという。このゼミはいつの間にかなくなってしまったが、それは各研究分野が別の方向を向いて進んだことの象徴的な帰結であるという。本集会は「人間とは何か」について改めて考える機会になったが、「サルを知ることで人間が分かる」わけではないこと、サルとヒトの共通祖先について安易な結論を下すべきではないこと、だが、本共同研究が進化の歴史を追う作業をいったん横に置いて人類社会の生成メカニズム（のみ？）に注目しているのは「もったいない」等のコメントをした。そして、共同研究のあり方として「人の話を聞いて自分の研究に反映させる」だけでなく、「自分の研究をこのように利用してほしい/こんな情報を教えてくれたら自分の研究の参考になる」ということがあれば知りたい等の質問・コメントをした。

4 . 討論

紙幅の関係上、コメンテーターからのコメント・質問に話題提供者が個別に答えた内容をここに記すことはできない。だが、貴重なコメントをコメンテーター諸氏のすべてと、時間切れで唯一となったフロアからの発言者からいただいたので、触れておく。それは、われわれの共同研究の内容や成果に関わるものではなく、共同研究そのものを問うもので、「共同研究と銘打っていないが、真の意味での共同研究になっていないのではないか」との指摘であった。その意味で、本集会はタイトルと内容に乖離があったことに気づかされ、また自省もした。確かに共同研究には、互いに関与しあうのはもちろんのこと、それ以上に、相手の土俵に踏み込み、方法を取りこみ、そして斬り結ぶという過程があってしかるべきであろう。それをまったくしてこなかったわけではないが、努力不足ということかと思う。次に同じような討論の機会があれば、共同研究の原点と広がりをめぐる議論ができるように、またこれからも続くわれわれの共同研究において、このことを常に自覚するように心がけたい。それにより、共同研究の成果が個人研究の寄せ集めと受け取られることを退けるとともに、広く霊長類学にも人類学にも、他の諸

学にも開かれたものとする意義があると思われるからである。